

第四十七回 前橋市民芸術文化祭
第二十九回 漢詩部門発表会

日時 令和六年十一月二十四日(日) 午後一時半～三時半
会場 前橋市第三コミュニティセンターホール

漢詩と書と吟詠

主催 前橋市

前橋市文化協会

主管 前橋市文化協会漢詩部会

後援 前橋市教育委員会

プログラム

開会

司会 森 榮一

一 式典の部

開式のことば

加辺宏味

主催者挨拶

小川 晶 前橋市長

主管団体挨拶

佐藤博之 文化協会長

祝 辞

小暮利明 前橋市文化協会漢詩部会長

来賓紹介

小井土松風先生 漢詩部会講師

閉式のことば

北爪ゆかり

二 漢詩作品発表の部

(一) 会員作品

(二) 賛助作品

閉会



(一) 会員作品

秋日郊行

しゅうじつこうこう

劔持 君枝

西風颯颯菊花薰

せいふう さつさつ きくかかお

野渡蜻蛉十里雲

やと せいれい じゅうり くも

村静無人秋一路

むらしず ひとな あきいちろ

歸來茅屋暮鐘聞

かえ きた ぼうおく ぼしやうき

大意

西風につて菊の花の薫りがしてくる。野中の渡し場には、トンボが乱れ飛び、空には雲が流れていく。村里に人は無く、静かで、秋の野を歩いていった。帰宅すると、日暮れを知らせる鐘の音が遠く聞こえてきた。

語 釈

蜻蛉—トンボ

白露滿庭

はくろてい み

長谷川 秀雄

曉煙負郭起啼鴉

ぎやうえん ふかく ていあ お

野草荒庭滴露華

やそう こうてい ろ かしたた

秋到空明玄鳥去

あきいた くうめい げんちようさ

重衾備御北窓家

ふすま かさ びぎよ ぼくそう いえ

大意

下町に住む私、早朝のカラスの鳴く声に起こされる。荒れた庭の雑草には、白く光る露がいつばいに下りた。空は遠くまで澄みわたり、秋となり軒先のつばめは南方に去って行った。北窓のある家に住んでいるため、そろそろ冬布団の準備でもするか。

語 釈

負郭—城郭を背にした郊外
空明—澄んだ空が遠くまで広がるさま
備御—備え防ぐ

起啼鴉—眠りからさめたカラスが鳴く
玄鳥—つばめ
重衾—布団を重ねて

消夏雜詩

消夏雜詩

天田 真弓

清晨池上白蓮香

清晨の池上 白蓮香り

古寺過來竹氣蒼

古寺 過ぎ来つて竹氣蒼し

謾謾松風涼味足

謾々たる松風 涼味足り

成秋一境水雲郷

秋を成して一境 水雲の郷

大意

清らかに晴れた明けがた、池には白蓮の花が開いて、古寺の横を通りすぎて来ると竹の蒼々とした感じが良い。松の間を吹きぬげる風で充分涼しさを味わっている。秋めいて来たこの辺りは水辺の景色のよい村である。

秋日郊行

秋日郊行

宮崎 幸子

西郊一路稻如雲

西郊 一路 稻 雲の如し

颯颯秋風散雀群

颯々たる秋風 雀群散ず

野菊花開田舎趣

野菊 花開いて田舎の趣

山遙隱隱暮鐘聞

山遙かに隱々 暮鐘聞こゆ

大意

いなか道を歩いていくと、稲が黄色い雲のように実って一面に広がっており、気持ちよい秋風がさつと吹いて、雀の群れが飛び立った。そこそこに野菊が咲き、田舎らしい景色を味わっていると、遠くの山のほうから夕暮れの鐘の音がかすかに聞こえてきた。

語 釈

颯颯—風のさつと吹くさま

隱隱—かすかにはつきりしないさま

雪中探梅

雪中探梅 せつちゆうたんばい

磯崎 弘毅

寒村滿地雪粧晨

寒村 かんそん 滿地 まんち 雪粧の晨 せつしようあした

天凍荒涼未促春

天凍 てんこお 荒涼 こうりよう 未 いま 促 はる 春 うな を促 うな がさず

竹外依稀花點點

竹外 ちくがい 依稀 いいき として花 はな 點 な 點 んでん

老梅疑是一枝新

老梅 ろうばい 疑 うたご うらくは是 こ 是 いつし 一 あら 枝 あら 新 あら たなり

大意

雪で被われた夜明けの寒村。天は凍つて荒涼としてまだ春は遠い。竹林の外に点々と花がかすかに見える。疑うまでもなくこれは老梅の新たな一枝である。

春日郊行

春日郊行 しゅんじつこうこう

寺内 正美

春郊一路問花期

春郊 しゅんこう 一路 いちろ 花期 かき を問 と

白白紅紅桃李枝

白白 はくはく 紅紅 こうこう 桃李 とうり の枝 えだ

天地清明吾意適

天地 てんち 清明 せいめい 吾 わ が意 い に適 かな

彩加田圃日西移

彩 さい は加 くわ わって田圃 でんぼ 日西 ひにし に移 うつ

大意

春の花は開いただろうかと郊外にでかけてみると、桃の花は紅色に、すももの花は真白に、どの枝にも咲き誇っています。時節は清明、天も地もまことに期待した通り、あたたかく清らかであり、田畑も緑となって花の色に映え、更に心引かれていくうちに日は西へ傾いていました。

春雨

春雨しゅんりゅう

北爪 ゆかり

半濕桃花寒意生

半なかば桃花とうかを湿うるおして寒意かんい生しょうじ

襲衣靜聽寂無聲

衣ころもを襲かさねて靜しずかに聽きけば寂せきとして声こえ無なし

還添楊柳絲絲雨

還また添そう 楊柳ようりゅう 糸々ししの雨あめ

一瞥幽庭草欲萌

一いち瞥べつす幽庭ゆうてい 草くさ 萌きざさんと欲ほつするを

大意

春の雨は、ほのかに桃の花を濡らし、少し肌寒い。一枚羽織って外の様子を伺ってみれば、とても静かである。柳の木にも糸のような細い雨が降りそそぐ。私の小さな庭の草木、花々がこの春の恵みで生きつきますように。

寒夜讀書

寒夜書かんやしよを讀よむ

幽風 須藤 章

凜烈三更夜讀寒

凜烈りんれつとして三更さんこう 夜讀やどく寒さむし

紙窓暗淡月侵欄

紙窓しそう 暗淡あんたん 月つき 欄らんを侵おかす

啜茶凭几孤燈下

茶ちやを啜すすり几きに凭よる孤燈ことうの下もと

尚友呶唔徹肺肝

尚友しょうゆう 呶唔いご 肺肝はいかんに徹てつす

大意

夜も更けてきびしい冬の寒さの中、本を読む。うつすらとした暗い障子の窓に明るい月の光が欄干を通して入ってきた。ぼつんと一つ寂しそうに照らす灯の下で熱いお茶を飲みながらひじつきにもたれかかり、昔の本を読むことは賢人と心が通じ楽しいものだ。

語 釈

尚友―昔の賢人を友とすること、転じて讀書の意にたとえる 呶唔―讀書の声の形容 肺肝―こころ

谷川嶽初雪

谷川嶽初雪 たにがわだけしよせつ

鈴木 潔州

落葉舞風寒意生

落葉 らくよう 風に舞いて寒意生じ かぜ ま かんいししよう

前林紅盡十分晴

前林 ぜんりん 紅は尽きて十分に晴る こう じゆうぶん は

谷川嶽上冠新雪

谷川嶽上 こくせんがくじよう 新雪を冠し しんせつ かん

歸鳥無聲天路行

歸鳥 きちよう 声無く天路行く こえな てんろ ゆ

大意

落葉が風に舞い散っていよいよ寒く、秋は深まり紅葉も尽きて空はよく晴れわたった。初冠雪の谷川嶽が碧天に白く輝き、ねぐらに帰る鳥が、声もたてずに上空を飛んでゆくのが見える。

語 釈

谷川嶽—上越国境にそびえる山

秋日郊行

秋日郊行 しゅうじつこうこう

森 榮一

風露溥溥屐下生

風露 ふうろ 溥々 たんたん 屐下に生じ げきか しょう

一川涵影小橋横

一川 いつせん 影を涵して小橋横たわる かげ ひた しょうきょうよこ

斜陽色淡西郊景

斜陽 しゃよう 色は淡し いろ あわ 西郊の景 せいこう けい

村靜遙聞牧笛聲

村靜かに遙かに聞く むらしず はる き 牧笛の聲 ぼくてき こえ

大意

涼しい風と露が多く集まって履物が濡れる。ひとつの川は小橋が水面に影を浸している。夕日は色淡く秋の野辺の景色、村は静かで遙かに牧童の吹く笛の音を聞く。

水村夏夜

水村夏夜

加辺 宏味

遙天殷殷訝雷聲

遙天 殷々 雷声かと訝る

煙火如花滅又明

煙火 花の如く 滅し又た明らかなり

別有纖纖橋上月

別に纖々たる橋上の月有り

江心涵影夜涼生

江心 影を涵して 夜涼 生ず

大意 雷かと思ふ音が空に響いてきたが、音は花火の音だった。花火は空に花のように開いたり消えたりしていた。花火とは別に夜空にはほつそりした月が橋の上に乗っていた。月は川の中に影を映していて気持ちのいい夜の涼しさを感じる事ができた。

語 釈 煙火—花火 纖纖—細くてしなやかなさま 江心—川のまん中

橋上暮景

橋上暮景

春風 小野里 春子

汨汨江濤橋上風

汨々たる江濤 橋上の風

一望夕麗水雲中

一望す夕麗 水雲の中

乘涼倚杖堪消日 涼に乗じて杖に寄りて日を消すに堪え

留景天涯分外紅 景を留めて天涯 分外に紅なり

大意 たえまなく流れる水音を聞きながら、橋上の心地よい風に吹かれている。見渡せば水も雲も夕映えにすっかり染まっている。涼しさに誘われ、ここに来たが橋上に広がる夕景色はまことに見る価値のある素晴らしい夕景であり、なおも天の果てまで紅色を留めてことの美しい。

語 釈 汨汨—波の起こるさま 夕麗—夕映え 堪消日—一日を潰す価値がある 分外—ことのほか

西郊秋景

西郊秋景せいこうしゅうけい

心明 小暮 利明

信步秋懷十里雲

歩ほに信まかす秋懷しゅうかい 十里じゅうりの雲くも

流風吹入水成紋

流風りゅうふう 吹ふき入いりて水みず 紋もんを成なす

斜陽色淡西郊景

斜陽しゃよう 色いろは淡あわし 西郊せいこうの景けい

目送無聲歸鳥分

目送もくそうす 声無こえなく歸鳥きちようわ分わかるるを

大意

そぞろ歩きの郊外は、雲が連なり風が流れるように吹き入り、水紋を作っている。西の空には夕焼けがぼんやりと秋景を醸し出している。その夕焼け空に群鳥が声も立てずに別れ別れにねぐらに帰っていくではないか、まさに郷愁を覚える。

山館避暑

山館避暑さんかんひしょ

優水 片倉 順子

溽暑逃來消夏遊

溽暑じよくしよ 逃のがれ来きたる 消夏しょうかの遊ゆう

山亭樹陰鳥聲柔

山亭さんていの樹陰じゆいん 鳥聲ちようせい柔やわかなり

晚風一陣清如水

晚風ばんふう 一いち陣じん 清せい 水みずの如ごとく

銀漢熒熒予借秋

銀漢ぎんかん 熒熒けいけいとして予あらかじめ秋あきを借かる

大意

厳しい暑さを凌いでやってきた。山亭の木陰では、鳥が心地よく鳴いている。夕方には一陣の風が吹き、とてもすがすがしい。天の川も光りかがやき、秋を先取りしたようだ。

語 釈

溽暑—きびしい暑さ 消夏遊—暑さをしのぐためにやってきた
熒熒—光りかがやくさま 予借秋—秋を先取りする

(二) 賛助作品

雲上夜行

雲上夜行うんじょうやこう

芳泉 小井土 幾代

窓外標燈眼下沈

窓外の標燈そうがいひょうとう 眼下に沈みがんかしず

飛機衝雨上千尋

飛機ひき 雨を衝いてあめつ 千尋に上るせんじんのぼ

英英雲海如潮湧

英々としてえいえい 雲海うんかい 潮の如く湧くしおごとわ

天路蒼蒼月色深

天路てんろ 蒼々そうそう 月色深しげつしよくふか

大意

滑走路の標灯はたちまち見えなくなり、飛行機は雨の中をぐんぐんと高度を上げる。やがて窓外に見たものは、潮のように湧き動き、明るく輝くまっ白い雲海で、機はそこに浮かんでいるようであった。蒼々たる天上の路は、鮮やかな光を放って月が照らしつくしていた。

語釈

標燈—滑走路の目印のあかり 飛機—飛行機 上千尋—上空高くのぼる 英英—雲などの美しく明らかなさま 天路—天上の路 月色深—月がきわだつてあざやかに輝いている

雲

雲くも

松風 小井土 政世

頻生碧海與天通

頻りにしき 碧海へきかい に生じてしゅう 天と通じてんつう

自在縦横變幻工

自在じざい 縦横じゅうおう 變幻へんげん 工たく になり

雨霽連峰秋色裏

雨霽あめは 連峰れんぼう 秋色しゅうしよく の裏うち

恰如白狗復乘風

恰もあたか 白狗はつく の如くごと 復たま 風かぜ に乗るの

大意

雲は絶えまなく青海原に生じて、天とも自由に往来し、消えたり現れたり思いのままに形を変えてゆく。雨が上がった秋の山々のあたりに、まるで白い子犬のように現れて風に乗って飛んでゆく。

語釈

自在—自由に 縦横—思いのままにふるまう 變幻工—たちまち形を変える 白狗—白い小犬にたとえていう